

## 第5章 大学生の学習意欲と卒後の職業的能力の獲得状態—日本の学士を対象に

河野 志穂（早稲田大学大学院）

### 1. はじめに

1990年代後半以降、大学生の学力低下が指摘されている。こうした実態としての学力低下と同時に、学力の下支えとなる学習意欲の低下も示唆されている。

学習意欲には、内発的な動機づけによるものと外発的な動機づけによるものがある。大学入試といった外発的な動機づけによって学習が促進される高校時代と異なり、自律的な学習者を理想とする大学では、知的探究心など内発的な動機づけにもとづく学習を前提とする側面があろう。

では、実際に、大学生は学習意欲をどれほど持っているのだろうか。また、学習意欲はどのような属性、学習経験を持つ人で高いのだろうか。

社会人向けの各種のビジネス書では、職業的能力の獲得における意欲の重要性が説かれている。また、小方（2001）が指摘するように、企業は採用においてコンピテンシーの観点から「能力の氷山モデル」の水面部分に位置する「態度・自己概念・価値観」や水面下（潜在部分）に位置する「性格・動機」を重視するようになってきていると言う。果たして、大学時代の学習意欲は卒業後の職業的能力の獲得状態と関連を持つのだろうか。

大学生の学習意欲にかんする先行研究としては、柳井・椎名・石井・野澤（2003）、松島・尾崎（2005）、見館・永井・北澤・上野（2008）等がある。これらの研究は、大学生の学習意欲の規定要因を、進学先、専攻の選択動機、職業観、教員とのコミュニケーション等の観点から、分析を試みたものである。以上の研究は、大学生の進学前および在学中の意識が学習意欲に与える影響の分析に主眼を置いており、大学在学中の学習意欲と卒業後の職業的能力の獲得状態には触れていない。

本調査では、卒後5年目の大卒者に、自身の大学時代の学習経験、成績、卒業時および現在における自身が保有する職業的能力の獲得状態に対する認識等を問うている。

本稿では、まず大卒者の大学時代の学習意欲の構造を調べたのち、これら学習意欲と大卒者の保有する卒業時および現在の職業的能力の獲得状態の関連を明らかにする。その際、大学時代の学習意欲がどのような職業的能力の獲得に影響を持っているのかを明らかにすることにより、現在の大学教育への示唆を得たい。

### 2. 分析対象

分析対象は、日本の学士 2279名（うち、男性は 972名、女性は 1204名、性別不明は 103名）である。

性別ごとに専攻の内訳を見ると〔表1〕、男性では工学、社会科学の専攻者が多く（ともに3割以上）、以下、農学、理学と続く。女性では、人文科学、社会科学の専攻者が多く

(ともに2割以上)、以下、社会福祉、教育学、農学と続く。

**表1 日本学士の属性、性別・専攻別**

	教育学	人文科学	社会科学	理学	工学	農学	医学・歯学	社会福祉	合計
男性	58(6.0%)	58(6.0%)	309(31.8%)	85(8.8%)	356(36.7%)	91(9.4%)	10(1.0%)	4(0.4%)	971(100.0%)
女性	130(10.8%)	279(23.3%)	276(23.0%)	52(4.3%)	92(7.7%)	124(10.3%)	68(5.7%)	178(14.8%)	1199(100.0%)
合計	188(8.7%)	337(15.5%)	585(27.0%)	137(6.3%)	448(20.6%)	215(9.9%)	78(3.6%)	182(8.4%)	2170(100.0%)

※ウェイトづけしていない集計による。

本分析において、学習意欲の指標として用いるのは、「試験に合格するための勉強だけでなく、それ以上の勉強をした」という質問項目である。調査の際には、「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」まで5件法で問うているが、本分析では、「あてはまらない」「MIDDLE」「あてはまる」の3段階の尺度に再度割り当てた。

本質問は、大学生時代に試験合格という外発的な動機づけによって求められる水準以上の学習を行っていたかを問うものであり、内発的な動機づけにもとづく学習意欲の有無を直接的に問うものではない。しかしながら、「あてはまる」の回答者は授業の認定水準以上の拡張的な学習を目指す、高い学習意欲の保有者と想定し、本質問項目を内発的な学習意欲の高低を示す指標とみなした。

以下の分析では、学習意欲と以下の7項目の関連を論じる。

<入学前>①卒業大学の志望度

②入学難易度との関連

<在学中>③専攻

④卒業大学の学部・学科で重視された教育方法

⑤大学時代の週あたりの学習時間

⑥大学時代の成績（優の割合）

<卒業後>⑦卒業時および現在の職業的能力の獲得状態

### 3. 学習意欲との関連

#### ①卒業大学の志望度

自身の卒業大学が第一志望か否かによって、在学中の学習意欲に違いが生ずるだろう。卒業大学が第一志望である者は、入学後も学習意欲が高く、そうでない者は低いのだろうか。

まず、上記の課題を検討する前に、調査対象者のうち卒業大学が第一志望である者の割合を性別、専攻別に概観する〔表2〕。

性別ごとにみた場合、男性の場合、卒業大学が第一志望である者の割合がもっとも高い専攻は社会福祉（100%）で、以下、教育学（70.9%）、人文科学（70.2%）、農学（61.8%）と続く。女性では、第一志望者の割合がもっとも高い専攻は農学（64.0%）で、以下、教育学（60.5%）、理学（58.0%）と続く。男女ともに、第一志望者の割合は教育学、農学で高く、工学で低いと言える。

表2 性別・専攻別、卒業大学の志望度の分布

男性	第一志望	非第一志望	合計	女性	第一志望	非第一志望	合計
教育学	39(70.9%)	16(29.1%)	55(5.9%)	教育学	75(60.5%)	49(39.5%)	124(10.8%)
人文科学	40(70.2%)	17(29.8%)	57(6.1%)	人文科学	142(53.0%)	126(47.0%)	268(23.3%)
社会科学	161(54.6%)	134(45.4%)	295(31.8%)	社会科学	148(55.2%)	120(44.8%)	268(23.3%)
理学	44(56.4%)	34(43.6%)	3(8.4%)	理学	29(58.0%)	21(42.0%)	50(4.4%)
工学	151(44.2%)	191(55.8%)	342(36.8%)	工学	38(44.2%)	48(55.8%)	86(7.5%)
農学	55(61.8%)	34(38.2%)	89(9.6%)	農学	73(64.0%)	41(36.0%)	114(9.9%)
医学・歯学	5(50.0%)	5(50.0%)	10(1.1%)	医学・歯学	33(49.3%)	34(50.7%)	67(5.8%)
社会福祉	3(100.0%)	0(0.0%)	3(0.3%)	社会福祉	94(54.7%)	78(45.3%)	172(15.0%)
合計	498(53.6%)	430(46.4%)	929(100.0%)	合計	632(55.0%)	517(45.0%)	1149(100.0%)

$\chi^2=30.6, df=7, p<.001$

$\chi^2=10.9, df=7$

つづいて、卒業大学の志望度と学習意欲の関連を見てみよう〔図1、図2〕。

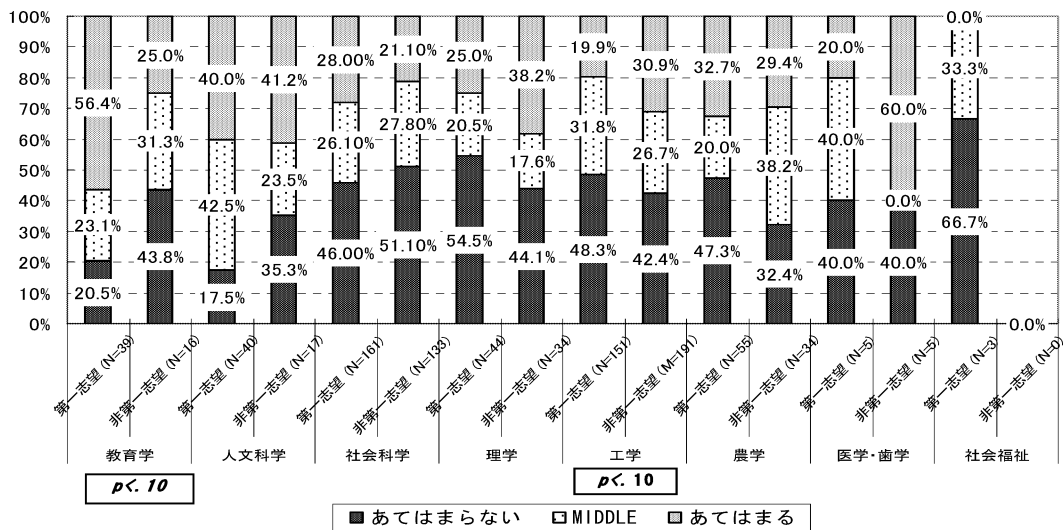


図1 男性、学習意欲（「試験に合格するため以上の勉強」）と卒業大学の志望度

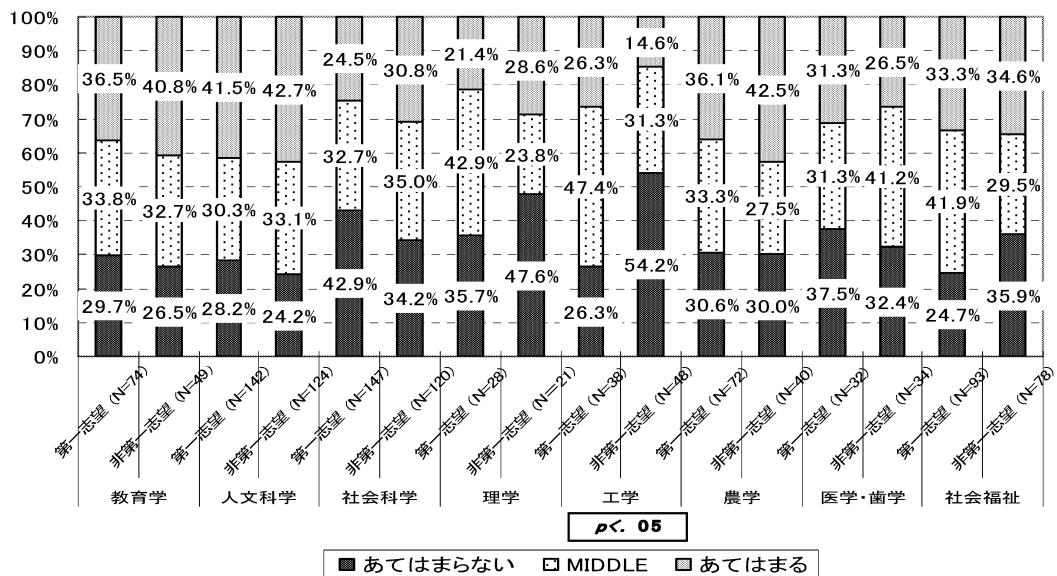


図2 女性、学習意欲（「試験に合格するため以上の勉強」）と卒業大学の志望度

「あてはまる」という回答にかんして、第一志望大学卒業者と非第一志望大学卒業者の割合の大きさを専攻ごとに比較すると、男性では、第一志望、非第一志望で専攻がほぼ半々に分かれている。第一志望大学卒業者のほうが「あてはまる」の割合が高いのは、教育学、社会科学、農学であり、逆に非第一志望大学卒業者の方が「あてはまる」の割合が高いのは、人文科学、理学、工学、医学・歯学である。特に、教育学、医学・歯学では、第一志望大学卒業者と非第一志望大学卒業者では倍以上、割合に隔たりがある。

一方、女性に目をうつすと、「あてはまる」という回答において、第一志望大学卒業者の割合が高いのは、工学、医学・歯学である。男性に比べると、第一志望大学卒業者と非第一志望大学卒業者の割合の違いは僅かながらも、「あてはまる」という回答において、非第一志望大学卒業者のほうが割合の高い専攻が多い。

以上から、第一志望大学への入学が、大学時代の高い学習意欲の土台となるとは必ずしも言えない可能性がある。

## ②入学難易度との関連

個人の能力に違いはあるが、高い難易度の大学に入学するためには、多くの学習時間を割く必要があると考える。難易度の高い大学の卒業者は、学習意欲が高いと言えるのだろうか。入学難易度と学習意欲の関連を見る。

本分析では、大学入学難易度として、1995年公表のデータ集【注1】を使用した。なお、公表されたデータ集に入学難易度が掲載されていない6大学140名分は分析から除外している。

入学難易度の分類にあたっては、難易度44から54までを難易度低と、難易度55から64までを難易度中と、難易度65以上（本調査の対象にかんしては難易度77が上限）を難易度高に分類した。

性別、入学難易度別に調査対象者の分布は以下のとおりである〔表3〕。

**表3 性別・大学入学難易度別、調査対象者の分布**

	男性	女性	合計
難易度低	445(50.8%)	645(55.5%)	1090(53.5%)
難易度中	250(28.5%)	353(30.4%)	603(29.6%)
難易度高	181(20.7%)	164(14.1%)	345(16.9%)
合計	876(100.0%)	1162(100.0%)	2038(100.0%)

次に、学習意欲と大学入学難易度の関連を見てみよう〔表4〕。男性をみると、すべての難易度において「あてはまらない」の割合がもっとも高い。女性にかんしては、いずれの難易度でも3つの選択肢にほぼ均等に分布している。

**表4 性別、学習意欲（「試験に合格するため以上の勉強」）と大学入学難易度**

男性	あてはまらない	MIDDLE	あてはまる	合計	女性	あてはまらない	MIDDLE	あてはまる	合計
難易度高	180(40.5%)	130(30.0%)	131(29.5%)	444(100.0%)	難易度高	198(31.1%)	220(34.5%)	219(34.4%)	637(100.0%)
難易度中	120(48.0%)	59(23.6%)	71(28.4%)	250(100.0%)	難易度中	122(34.8%)	115(32.8%)	114(32.5%)	351(100.0%)
難易度低	72(40.0%)	54(30.0%)	54(30.0%)	180(100.0%)	難易度低	56(34.4%)	55(33.7%)	52(31.9%)	163(100.0%)
合計	372(42.6%)	246(28.1%)	256(29.3%)	874(100.0%)	合計	376(32.7%)	390(33.9%)	385(33.4%)	1151(100.0%)

$\chi^2=5.1 \quad df=4$

$\chi^2=1.7 \quad df=4$

※下線は最も回答の多い選択肢

**③専攻**

「①卒業大学の志望度」「②入学難易度との関連」では、大学入学前に焦点をあてたが、ここからは、在学中の学習経験等について考察する。

どのような専攻で学習意欲が高いのだろうか。性別、専攻別にみよう〔表5〕。

**表5 性別・専攻別、学習意欲（「試験に合格するため以上の勉強」）の分布**

男性	あてはまらない	MIDDLE	あてはまる	合計	女性	あてはまらない	MIDDLE	あてはまる	合計
教育学	16(27.6%)	15(25.9%)	27(46.6%)	58(100.0%)	教育学	38(29.5%)	41(31.8%)	50(38.8%)	129(100.0%)
人文科学	13(22.4%)	21(36.2%)	24(41.4%)	58(100.0%)	人文科学	73(26.4%)	88(31.8%)	116(41.9%)	277(100.0%)
社会科学	145(47.1%)	85(27.6%)	78(25.3%)	308(100.0%)	社会科学	104(38.0%)	93(33.9%)	77(28.1%)	274(100.0%)
理学	41(48.2%)	17(20.0%)	27(31.8%)	85(100.0%)	理学	22(43.1%)	17(33.3%)	12(23.5%)	51(100.0%)
工学	161(45.4%)	105(29.6%)	89(25.1%)	355(100.0%)	工学	39(42.4%)	34(37.0%)	19(20.7%)	92(100.0%)
農学	38(41.8%)	24(26.4%)	29(31.9%)	91(100.0%)	農学	37(30.6%)	40(33.1%)	44(36.4%)	121(100.0%)
医学・歯学	4(40.0%)	2(20.0%)	4(40.0%)	10(100.0%)	医学・歯学	24(35.8%)	24(35.8%)	19(28.4%)	67(100.0%)
社会福祉	2(50.0%)	2(50.0%)	0(0.0%)	4(100.0%)	社会福祉	51(28.8%)	64(36.2%)	62(35.0%)	177(100.0%)
合計	420(43.3%)	271(28.0%)	278(28.7%)	969(100.0%)	合計	388(32.7%)	401(33.8%)	399(33.6%)	1188(100.0%)

$\chi^2=30.6, df=14, p<.01$

$\chi^2=29.0, df=14, p\leq .01$

※下線は最も回答の多い選択肢

多数派となる選択肢に着目すると、男性の場合、総じて「あてはまらない」を選択する傾向が強い。「あてはまる」が多数派の選択肢となるのは教育学、人文科学のみである。他方、女性では、専攻ごとに多数派となる選択肢がひろく分布している。

なお、男女ともに多数派の選択肢が同一なのは、「あてはまる」では教育学、人文科学で、「あてはまらない」では社会科学、理学、工学、医学・歯学である。

柳井他（2003）が示すように、男性よりも女性のほうが学習に積極的に取り組む傾向があるが、本調査でも同様の結果が得られたと言えよう。また、教育学、人文科学における学習意欲の高さ、社会科学、理学、工学における学習意欲の低さは、専攻分野の特性と言えるかについては、今後、改めて検証の必要がある。

**④卒業大学の学部・学科で重視された教育方法**

学部・学科で重視された教育方法は学習意欲に関連を持つのだろうか。検証しよう〔表6〕。

**表6 学習意欲（「試験に合格するため以上の勉強」と卒業大学の学部・学科で重視された教育方法**

	あてはまらない			MIDDLE			あてはまる			F値	z <sup>2</sup> 検定
	平均値	標準偏差	順位	平均値	標準偏差	順位	平均値	標準偏差	順位		
講義	3.70	(0.94)	1	3.79	(0.78)	1	3.97	(0.83)	1	18.43	.000
論文やレポートの執筆	3.37	(1.07)	2	3.63	(0.88)	2	3.83	(0.99)	2	42.86	.000
学問的な理論や概念枠組み	3.36	(0.93)	3	3.47	(0.77)	3	3.67	(0.88)	3	24.92	.000
教師が主導的に教えること	3.24	(0.94)	4	3.33	(0.77)	4	3.45	(0.93)	4	9.92	.000
口頭でのプレゼンテーション	2.49	(1.10)	6	2.85	(1.01)	5	3.11	(1.12)	5	63.29	.000
グループ学習	2.61	(1.07)	5	2.91	(1.01)	6	3.10	(1.09)	6	42.17	.000
経験的・実務的な知識	2.39	(1.04)	8	2.79	(1.01)	7	2.94	(1.14)	7	54.99	.000
プロジェクト型・問題解決型学習	2.36	(0.92)	9	2.69	(0.85)	8	2.85	(0.98)	8	56.04	.000
研究プロジェクトへの参加	2.27	(1.09)	10	2.60	(1.03)	9	2.63	(1.17)	9	25.73	.000
選択式の客観試験	2.42	(0.96)	7	2.59	(0.83)	10	2.54	(0.96)	10	7.00	.001
インターンシップ、職場体験実習	1.99	(1.10)	11	2.32	(1.12)	11	2.37	(1.25)	11	24.63	.000

※ 「あてはまる」の平均値の高い順で並べ替えを行った。

3つの選択肢のうち、総じて「あてはまる」の平均値が高い傾向にあった。また、「あてはまる」に着目して、平均値の高い順に並べ替えを行ったところ、「MIDDLE」と「あてはまる」が同じ配列になった。なお、「あてはまらない」にかんしても、上位4項目と最下位項目が同じ配列になった。

3つの選択肢と順位に着目すると、学習意欲の高低にかかわらず、「講義」「論文やレポートの執筆」「学問的な理論や概念枠組み」は、教育方法として重視されていたと回答する者が多く、逆に「研究プロジェクトへの参加」「インターンシップ、職場体験実習」にかんしてはあまり重視されていないとする傾向にある。

なお、「選択式の客観試験」にかんしては、選択肢により順位が異なり、「MIDDLE」「あてはまる」では11番目であるのに対し、「あてはまらない」では7番目となっている。

### ⑤大学時代の週あたり学習時間

学習時間の長さや学習意欲に関連はあるのだろうか。週あたりの学習時間と学習意欲について検討する〔表7〕。

男女ともに、学習時間の平均にかんしては、学習意欲が高い方が長い傾向にある。ただし、男性において、もっとも学習時間が長いのは、農学「MIDDLE」の36.3時間である。これは、もっとも学習時間の少ない社会福祉「あてはまらない」の6.5時間と比較すると、約30時間の開きがある。また、男性にかんしては人文科学「あてはまる」の学習時間の長さにも注目したい。

一方、女性に目を移すと、男性と同様、学習意欲が高いほうが学習時間の平均が長い傾向にある。ただし、もっとも学習時間が長いのは、医学・歯学の「MIDDLE」の39.5時間である。また、「あてはまる」を見ると、理系は総じて30時間を超えている。男性の場合、30時間以上は、農学の「MIDDLE」「あてはまる」、人文科学の「あてはまる」のみであるのと対照的である。

また、先の「③専攻」において、社会科学、理学、工学における学習意欲の低さが明らかになったが、学習時間を見ると、必ずしもこれらの専攻の学習時間が短いわけではない

ことがわかる。例えば、男性の理学「あてはまらない」の学習時間（23.2時間）は、教育学「MIDDLE」の学習時間（21.3時間）よりも長い。

ただし、本質問項目における学習時間には、講義のほか、自学自習やインターンシップなどにあてられた時間も含まれることに留意が必要である。

**表7 性別・専攻別、学習意欲（「試験に合格するため以上の勉強」と週あたり学習時間**

男性	あてはまらない		MIDDLE		あてはまる		合計	
	学習時間の平均	回答者の割合	学習時間の平均	回答者の割合	学習時間の平均	回答者の割合	学習時間の平均	回答者の割合
教育学 (N=57)	10.3	28.1%	21.3	24.60%	25.8	47.4%	19.1	100.0%
人文科学 (N=56)	19.8	23.2%	21.0	35.70%	31.6	41.1%	24.1	100.0%
社会科学 (N=303)	17.6	47.3%	22.1	27.10%	28.4	25.7%	22.7	100.0%
理学 (N=80)	23.2	48.8%	27.8	21.30%	28.7	30.0%	26.5	100.0%
工学 (N=347)	20.2	45.0%	25.0	29.70%	29.3	25.4%	24.8	100.0%
農学 (N=88)	24.1	42.0%	36.3	27.30%	33.4	30.7%	31.3	100.0%
医学・歯学 (N=10)	24.3	40.0%	5.0	20.00%	24.3	40.0%	17.8	100.0%
社会福祉 (N=4)	6.5	50.0%	13.0	50.00%	0.0	0.0%	6.5	100.0%
合計 (N=945)	18.2	40.5%	21.4	29.5%	25.2	30.0%	21.6	100.0%

女性	あてはまらない		MIDDLE		あてはまる		合計	
	学習時間の平均	回答者の割合	学習時間の平均	回答者の割合	学習時間の平均	回答者の割合	学習時間の平均	回答者の割合
教育学 (N=121)	22.2	28.9%	18.5	32.20%	28.8	38.8%	23.2	100.0%
人文科学 (N=266)	18.7	26.3%	19.7	31.20%	24.0	42.5%	20.8	100.0%
社会科学 (N=267)	16.2	37.5%	20.1	34.50%	25.8	28.1%	20.7	100.0%
理学 (N=51)	20.5	43.1%	24.7	33.30%	37.8	23.5%	27.6	100.0%
工学 (N=90)	22.3	42.2%	26.0	36.70%	31.4	21.1%	26.6	100.0%
農学 (N=116)	21.6	31.0%	24.7	33.60%	37.5	35.3%	27.9	100.0%
医学・歯学 (N=64)	30.7	35.9%	39.5	35.90%	33.2	28.1%	34.5	100.0%
社会福祉 (N=170)	26.7	28.8%	24.5	34.70%	31.2	36.5%	27.5	100.0%
合計 (N=1145)	22.4	34.2%	24.7	34.0%	31.2	31.7%	26.1	100.0%

※ 卒業前1～2年前の典型的な学期における週あたりの学習時間。学習時間には、講義、自学自習、インターンシップなどの時間を含む。

### ⑥大学時代の成績（優の割合）

大学時代の成績が良いと学習意欲も高いのだろうか。学習意欲と成績（優の割合）の関連を検討する。なお、ここでは成績の指標を「優の割合」とし、6割未満と6割以上で区分した。本調査における、成績（優の割合）の分布は次のとおりである【表8】。

「優6割以上」の回答者の割合は、男性全体で63.8%、女性全体で78.8%と、女性のほうが高い傾向にある。また、社会科学（男性）で、「優6割以上」の回答者が、男性平均より約15ポイント少ない点が顕著である。

表8 性別・専攻別、成績（優の割合）の分布

男性	6割未満	6割以上	女性	6割未満	6割以上
教育学 (N=56)	33.9%	66.1%	教育学 (N=122)	17.2%	82.8%
人文科学 (N=57)	38.6%	61.4%	人文科学 (N=268)	19.8%	80.2%
社会科学 (N=296)	52.0%	48.0%	社会科学 (N=266)	18.4%	81.6%
理学 (N=81)	48.1%	51.9%	理学 (N=48)	27.1%	72.9%
工学 (N=342)	39.2%	60.8%	工学 (N=85)	24.7%	75.3%
農学 (N=90)	44.4%	55.6%	農学 (N=115)	18.3%	81.7%
医学・歯学 (N=9)	33.3%	66.7%	医学・歯学 (N=63)	28.6%	71.4%
社会福祉 (N=4)	0.0%	100.0%	社会福祉 (N=167)	15.6%	84.4%
合計 (N=935)	36.2%	63.8%	合計 (N=1134)	21.2%	78.8%

$\chi^2=18.4, df=7, p<.01$

$\chi^2=8.4, df=7$

つぎに、学習意欲と成績（優の割合）の関連を見よう〔図3、図4〕。

「あてはまる」に着目すると、男女ともにすべての専攻で、優の割合6割以上のほうが6割未満よりも「あてはまる」の割合が高い。

特に、人文科学（男性・女性）、農学（男性・女性）、医学・歯学（男性・女性）、理学（男性）、社会科学（女性）、工学（女性）では、優の割合6割未満と6割以上で20ポイント以上の開きがある。

こうしたことから、学習意欲の高さと成績の良さ（優の割合の高さ）には関連があると言えよう。

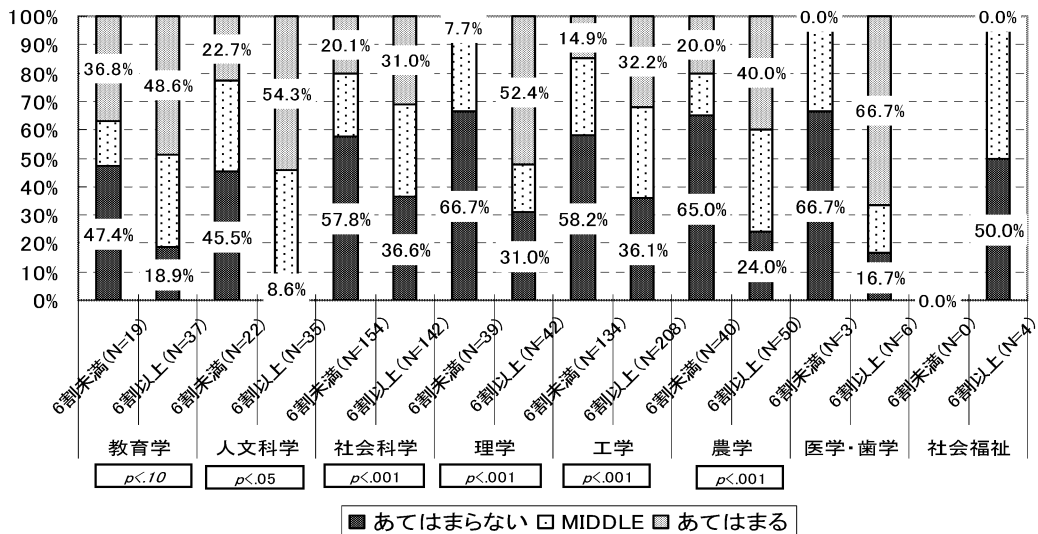


図3 男性・専攻別、学習意欲（「試験に合格するため以上の勉強」と成績（優の割合）



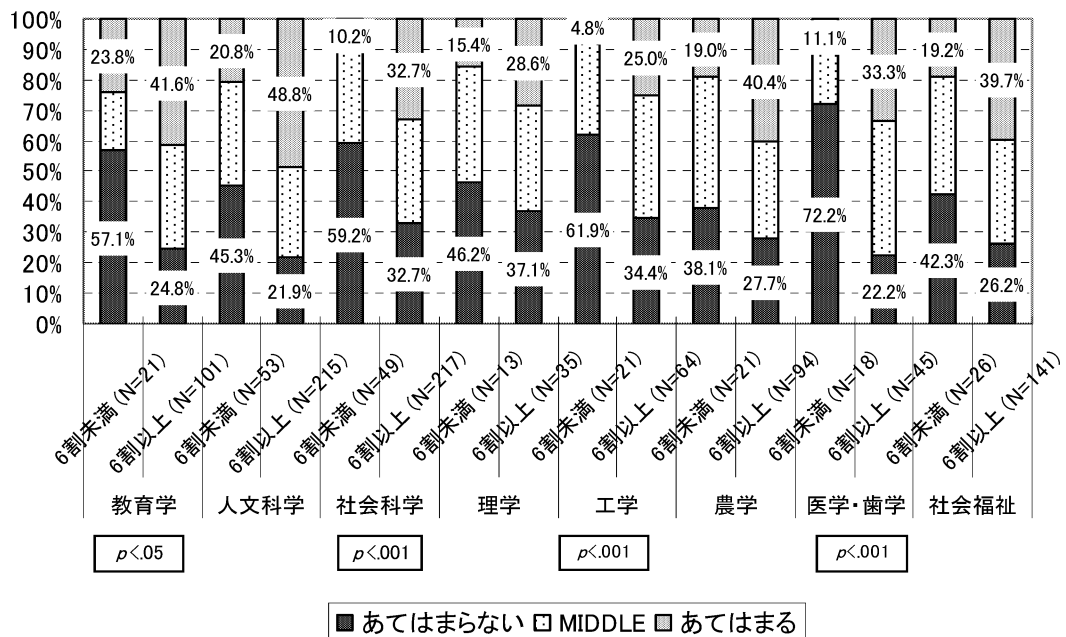


図4 女性・専攻別、学習意欲（「試験に合格するため以上の勉強」と成績（優の割合）

#### ⑥卒業時および現在の職業的能力の獲得状態

最後に、大学時代の学習意欲と卒業時および現在の職業的能力の獲得状態について検討する〔表9〕。大学時代の学習意欲によって、卒業時および現在の職業的能力の獲得状態に違いはみられるのだろうか。

卒業時、現在のいずれの項目にかんしても、「あてはまる」の回答者ほど、職業的能力の獲得状態の平均値が高い傾向にある。

まず、卒業時を見てみよう。「あてはまる」に着目し、平均値の高い順に職業的能力の項目を並べ替えたところ、上位3項目は「⑭コンピュータやインターネットを活用する力（平均値 5.09）」「①大学で学んだ学問分野や専門領域に精通していること（平均値 4.11）」「④新たな知識を素早く身につける力（平均値 4.11）」であった。他方、下位3項目は「⑤効果的に交渉する力（3.02）」「⑩外国語で書いたり話したりする力（3.04）」「⑬自分の権限を適切に行使する力（3.22）」であった。上位3項目は、コンピュータ運用能力、大学での専門領域など知識の習得度であり、下位3項目は仕事の自律性、外国語運用能力、他者とのコミュニケーション能力と言えよう。

また、「あてはまる」から「あてはまらない」を引いた差を比較したところ、もっとも差が大きい項目は、「①大学で学んだ学問分野や専門領域に精通していること（0.82 ポイント差）」で、以下「⑩記録、資料、報告書等を作成する力（0.64 ポイント差）」、「⑩外国語で書いたり話したりする力（0.62 ポイント差）」と続く。逆に、差が小さかった項目は「⑬自分の権限を適切に行使する力（0.25 ポイント差）」、「⑤効果的に交渉する力（0.32 ポイント差）」、「⑧複数の活動を調整する能力（0.33 ポイント差）」であった。以上からわかる

ように、卒業時点では、大学教育で一般的に教授されるものとされている学問分野・専門領域の知識習得度、文書作成能力、外国語の運用能力の点で、学習意欲の高い者と低い者の差がついている。

この結果は、大学時代の学習意欲が卒業時の職業的能力の獲得状態に関連を持つという当然の結果といえよう。

では、大学時代の学習意欲は、卒後5年の現在の職業的能力の獲得状態に関連を持つのだろうか〔表10〕。「あてはまる」に着目して、平均値の高い順に職業的能力の項目を並べ替えたところ、上位3項目は「⑩他の人と生産的に仕事をする力（平均値4.88）」「⑨時間を有効に使う力（平均値4.78）」「⑱記録、資料、報告書等を作成する力（平均値4.77）」であり、下位3項目は「⑲外国語で書いたり話したりする力（2.98）」「⑰製品、アイデア、レポート等のプレゼンテーション能力（4.10）」「⑬自分の権限を適切に行使する力（4.17）」であった。外国語運用能力、文書作成能力を除いた、上位2項目、下位2項目は、従来、大学教育で培うことが目指されてきたというよりも、仕事をしながら身につけることが目指されてきた能力と言えよう。

また、「あてはまる」から「あてはまらない」を引いた差を比較したところ、もっとも差が大きい項目は、「①大学で学んだ学問分野や専門領域に精通していること（0.92ポイント差）」で、以下「②その他の学問分野や専門領域に関する知識（0.58ポイント差）」「⑲外国語で書いたり話したりする力（0.56ポイント差）」であった。逆に、差が小さかった項目は、「⑬自分の権限を適切に行使する力（0.31ポイント差）」、「⑤効果的に交渉する力（0.33ポイント差）」「⑥プレッシャーの中で力を発揮すること（0.36ポイント差）」である。これらから、大学時代の学習意欲の高低によって、現在の能力で差がでるのは、外国語運用能力や大学の専門領域の知識習得度など、大学教育で一般的に教授される能力であり、仕事の自律性や他者との交渉力、プレッシャーのコントロール力の習得にかんしては、大学時代の学習意欲の高低とは関連が低いことがわかる。

また、以上の考察をつうじて得られる示唆として、卒業時、現在の外国語運用能力の低さが挙げられよう。外国語教育への取り組み度合いは大学や個人差のある領域であるが、本結果はグローバル化する社会において、大学教育における外国語教育のあり方に再考を促すものと言えよう。

**表9 学習意欲（「試験に合格するため以上の勉強」）別、卒業時の職業的能力の獲得状態**

卒業時の職業的能力	あてはまらない		MIDDLE		あてはまる		あてはまる -あてはまらない	F値	χ <sup>2</sup> 検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
⑭コンピュータやインターネットを活用する力	4.70	(1.41)	4.92	(1.21)	5.09	(1.32)	0.39	20.02	.000
①大学で学んだ学問分野や専門領域に精通していること	3.29	(1.36)	3.73	(1.30)	4.11	(1.44)	0.82	66.40	.000
④新たな知識を素早く身につける力	3.60	(1.37)	3.83	(1.21)	4.11	(1.32)	0.51	27.20	.000
⑩他の人と生産的に仕事をする力	3.49	(1.36)	3.70	(1.19)	3.84	(1.37)	0.35	12.84	.000
⑱記録、資料、報告書等を作成する力	3.10	(1.33)	3.44	(1.27)	3.74	(1.38)	0.64	41.91	.000
⑨時間を有効に使う力	3.16	(1.43)	3.47	(1.26)	3.72	(1.48)	0.57	30.29	.000
③分析的に考察する力	3.22	(1.29)	3.44	(1.16)	3.72	(1.35)	0.50	28.08	.000
⑮自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	3.11	(1.29)	3.45	(1.18)	3.70	(1.35)	0.58	38.19	.000
⑮新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	3.12	(1.25)	3.33	(1.15)	3.63	(1.29)	0.51	30.65	.000
⑫他の人に自身の意図を明確に伝える力	3.09	(1.29)	3.34	(1.17)	3.56	(1.33)	0.47	24.88	.000
⑦新たなチャンスに機敏に対応する力	3.06	(1.34)	3.34	(1.23)	3.49	(1.41)	0.44	20.45	.000
⑪他の人の知識や能力を結集する力	3.00	(1.25)	3.23	(1.13)	3.42	(1.30)	0.42	20.83	.000
⑧複数の活動を調整する能力	3.07	(1.37)	3.32	(1.16)	3.40	(1.33)	0.33	13.11	.000
⑥プレッシャーの中で力を発揮すること	2.93	(1.35)	3.11	(1.19)	3.36	(1.40)	0.43	19.11	.000
⑰製品、アイデア、レポート等のプレゼンテーション能力	2.83	(1.37)	3.18	(1.29)	3.35	(1.33)	0.51	28.24	.000
②その他の学問分野や専門領域に関する知識	2.66	(1.25)	3.06	(1.23)	3.25	(1.34)	0.59	41.93	.000
⑬自分の権限を適切に行使する力	2.96	(1.28)	3.12	(1.20)	3.22	(1.32)	0.25	7.39	.011
⑲外国語で書いたり話したりする力	2.42	(1.41)	2.77	(1.44)	3.04	(1.61)	0.62	31.89	.000
⑤効果的に交渉する力	2.69	(1.26)	2.94	(1.20)	3.02	(1.28)	0.32	13.47	.000

※ 「あてはまる」の平均値の高い順で並べ替えを行った。

表 10 学習意欲（「試験に合格するため以上の勉強」）別、現在の職業的能力の獲得状態

現在の職業的能力	あてはまらない		MIDDLE		あてはまる		F値	χ <sup>2</sup> 検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
⑩他の人と生産的に仕事をする力	4.49	(1.33)	4.69	(1.12)	4.88	(1.23)	0.39	18.15	.000
⑨時間を有効に使う力	4.35	(1.40)	4.64	(1.22)	4.78	(1.37)	0.42	19.23	.000
⑩記録、資料、報告書等を作成する力	4.27	(1.33)	4.52	(1.28)	4.77	(1.31)	0.50	26.89	.000
③分析的に考察する力	4.24	(1.26)	4.41	(1.08)	4.75	(1.16)	0.50	33.91	.000
④新たな知識を素早く身につける力	4.26	(1.31)	4.41	(1.15)	4.69	(1.22)	0.43	21.97	.000
⑫他の人に自身の意図を明確に伝える力	4.14	(1.29)	4.35	(1.21)	4.64	(1.30)	0.50	27.88	.000
⑧複数の活動を調整する能力	4.16	(1.39)	4.42	(1.25)	4.63	(1.35)	0.48	23.42	.000
⑭コンピュータやインターネットを活用する力	4.13	(1.22)	4.32	(1.17)	4.62	(1.28)	0.50	16.11	.000
⑮新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	4.13	(1.22)	4.32	(1.17)	4.62	(1.28)	0.50	29.69	.000
⑯自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	4.12	(1.29)	4.34	(1.15)	4.62	(1.25)	0.50	29.30	.000
⑥プレッシャーの中で力を発揮すること	4.11	(1.43)	4.23	(1.31)	4.47	(1.34)	0.36	12.51	.000
①大学で学んだ学問分野や専門領域に精通していること	3.41	(1.38)	3.91	(1.24)	4.33	(1.29)	0.92	91.53	.000
①他の人の知識や能力を結集する力	3.88	(1.26)	4.07	(1.16)	4.33	(1.27)	0.45	23.55	.000
⑤効果的に交渉する力	3.97	(1.44)	4.12	(1.36)	4.31	(1.41)	0.33	10.17	.000
⑦新たなチャンスに機敏に対応する力	3.89	(1.38)	4.11	(1.27)	4.27	(1.35)	0.38	14.48	.000
②その他の学問分野や専門領域に関する知識	3.66	(1.32)	3.94	(1.18)	4.25	(1.20)	0.58	40.08	.000
⑬自分の権限を適切に行使する力	3.86	(1.26)	4.04	(1.21)	4.17	(1.36)	0.31	10.94	.000
⑪製品、アイデア、レポート等のプレゼンテーション能力	3.56	(1.45)	3.89	(1.34)	4.10	(1.41)	0.54	27.75	.000
⑬外国語で書いたり話したりする力	2.42	(1.49)	2.73	(1.43)	2.98	(1.58)	0.56	25.16	.000

※「あてはまる」の平均値の高い順で並べ替えを行った。

#### 4. おわりに

本稿では、大学生の学習意欲の構造およびそれが卒業時と現在の職業的能力の獲得状態にいかなる関連を持つかを考察してきた。

その結果、学習意欲の構造にかんしては、次の5点が明らかとなった。第1は第一志望大学への入学が必ずしも高い学習意欲と関連していないこと、第2は大学の入学難易度の高さ＝学習意欲の高さではないこと、第3は学習意欲は男性よりも女性で高い傾向にあり、専攻では教育学、人文科学で高く、社会科学、理学、工学で低いこと、第4は学習意欲の高さと平均学習時間の長さに関連があること、第5は学習意欲の高さと成績の良さに関連があることである。

次に、学習意欲と卒業後と現在の職業的能力の獲得状態にかんしては、次の2点が明らかとなった。第1は、卒業時、現在、いずれも大学生時代の学習意欲の高い人ほど職業的能力の獲得状態が高いこと、第2は、高い学習意欲を示す人の平均値から低い学習意欲を示す人の平均値を引いた結果、卒業時、現在、共通に大きな差がみられたのは、大学で学んだ学問分野や専門領域の知識習得度、外国語の運用能力であること、である。特に、外国語の運用能力にかんしては、大学時代に高い学習意欲を示す者であっても、卒業時、現在、ともに獲得状態は低く、既存の外国語教育に再考を促す結果と言える。

大学時代の学習意欲の高低が現在の職業的能力の獲得状態の高低に通じるという本稿の結果は、矢野（2005）の唱える「学び習慣仮説」とともに、大学教育の有用性を支持するものとなる。

本稿では、学習意欲の構造にかんして、入学前では大学の志望度・入学難易度、在学中では専攻、大学時代に重視された教育方法などの観点から分析を試みた。本分析では、これら以外に学生の学習意欲に関連を持つと思われる項目—たとえば、学生が所属する大学のクラスサイズ、父母の学歴など—には目を配ることができなかった。また、本考察で用いた様々な要素が、大学生の学習意欲をどれほど規定しているかについても分析ができなかった。これらを併せた大学生の学習意欲の詳細な構造分析については、別の機会に検証を試みたい。

**【注】**

(1) データの出典は、朝日新聞社、1995、『大学ランキング ‘96』。入学難易度の数値はベネッセコーポレーションの協力による。

**【参考文献】**

- 松島るみ・尾崎仁美、2005「大学進学動機と学習意欲・授業選択態度の関連—新入生を対象として」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』35号、177-187頁。
- 溝上慎一 編、2004『学生の学びを支援する大学教育』東信堂。
- 見館好隆・永井正洋・北澤武・上野淳、2008「大学生の学習意欲,大学生活の満足度を規定する要因について」『日本教育工学会論文誌』32巻2号、189-195頁。
- 小方直幸、2001「コンピテンシーは大学教育を変えるか」『高等教育研究紀要』第4集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、71-91頁。
- 柳井春夫・椎名久美子・石井秀宗・野澤雄樹、2003「大学生の学習意欲等に関する調査研究」『大学入試センター研究紀要』32号、52-125頁。
- 矢野眞和、2005『大学改革の海図』、玉川大学出版部。